

2026年度

慶應義塾大学入学試験問題

文 学 部

地 理 歴 史
(世界史)

- 注 意
1. 受験番号(2ヶ所)と氏名は、所定欄に必ず記入してください。
受験番号は、所定欄の枠内に一字一字記入してください。
 2. 解答は、必ず解答用紙の指定の箇所に記入してください。
 3. 解答用紙は、必ず机の上に残しておいてください。
 4. この問題冊子は、表紙を含めて11ページあります。試験開始の
合図とともに全てのページが揃っているかどうかを確認してく
ださい。ページが抜けていたり、重複していたりする場合には、
直ちに監督者に申し出てください。

解答は別紙の解答欄に記入しなさい。

I 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ E ）に最も適切な語句を記入し、下線部（1）～（5）および下線部（ア）に関する各設問に答えなさい。

人類は、その起源より、あらゆる活動の場面において長らく人力と獣力に依存してきた。これらの動力源は、いうまでもなく食事と休息を必要とし、そして、個々の力は限られたものだった。しかし、古代には世界各地で水力の利用が始まり、これによって人類は、非生物的動力源の利用という画期的な一步を踏み出し、歴史の新たなページがめくられることになった。最新の研究成果によれば、古代地中海世界、なかでも古代ローマにおいては、各地で水車をはじめとする水力機関が利用されていた。たとえば、ユリウス＝カエサルの遠征記録である『（ A ）戦記』の舞台となった（ A ）地方では、各地で水車跡が発見されている。なかでも、（ A ）の南部、すなわち現在のフランス南部に位置する⁽¹⁾アルルの近郊では、丘陵の傾斜地に16基の水車とそれと連動する挽き臼が設置され、専用の送水路によって運ばれた水をそれらの水車に流すことで、24時間で約9トンの小麦粉を挽くことが可能であったと試算されており、これによってアルルの住民の需要を満たしていたとされる。また、ローマ時代に農業に次いで重要であった鉱業においても水力は盛んに利用され、鉱床を覆う表土に大量の水を流して鉱床を露出させたり、鉱石を砕くための碎石機の動力源として水力が用いられた。こうして、大量の労働力が投入されたことに加え、水力技術を通じ金属産出量を高める努力がなされた結果、ローマ共和政末期から帝政初期にかけての時代に、ローマ世界では、19世紀の産業革命期に匹敵するほどの金属が産出されていたと考えられている。

西ヨーロッパにおける水車等の水力機関に関する技術は、古代末期の政治的・経済的な混乱を生き延び、中世に入ってからその技術は西ヨーロッパ各地で継承され、カロリング朝フランク王国の下では、領内各地の中小河川に製粉用の水車が設置されていた。この流れをさらに加速させたのが、修道院による各種水車の使用だった。なかでも、清貧と労働を重視し、聖ベルナル（ベルナルドゥス）が改革者として活躍した（ B ）修道会は、12世紀以降の大開墾時代にあって中心的な存在であったが、その自給自足的生活を支えたのが水車であり、製粉のみならず縮絨（毛織物製造の一工程）、金属加工等の様々な生産活動において省力化を可能とした。そして、（ B ）修道会が西ヨーロッパ各地に新たな修道院を設立し、そこに水車とその技術を持ち込んだことによって、その周辺地域に水車が普及していくことにもつながった。

水車をはじめとする水力の利用は、（ B ）修道会の衰退後も13世紀から18世紀にかけて西ヨーロッパ各地でさらなる進展を見た。水車の設置数の増大のみならず、関連技術も向上し、貯水ダムとそこから水車まで水を引く導水路の整備によって、水車の欠点の一つであった安定的な水量確保の問題が改善された。こうして水力は、⁽²⁾西ヨーロッパの産業に必要不可欠な動力となったのである。

たとえば、毛織物工業は、古代から続く伝統的な産業であったが、水車の導入によって大きな変貌を遂げた。中世盛期における毛織物工業の中心地の一つは（ C ）地方であり、その中心都市はハンザの商館がおかれたブリュージュであった。そのブリュージュでは、遠隔市場向けの高級毛織物を製造するために昔ながらの人力による縮絨が行われていた。これに対し、（ C ）地方に隣接するブラバント地方では、13世紀に縮絨用の水車を用いて低品質ながらも廉価な製品が製造され、幅広い需要を支えた。

近代に入ってからでも水力利用は益々拡大し、水車羽根ないしはバケットの改良等によるエネルギー効率の向上と相まって、西ヨーロッパの諸産業における水力依存は増大し続けたのである。なかでも、18世紀イギリスで目覚ましい技術革新を遂げた綿工業での水力利用は特筆に値する。その代表例が、イギリス人である（ D ）が発明した水力紡績機であり、これによって熟練労働力への依存が軽減したのみならず、連続作業も可能となることで綿糸の工場制大量生産に道を開くこととなった。この成長著しい綿工業がイギリスの第1次産業革命の牽引役となったが、石炭・蒸気の利用を特徴とするこの大変革も、その下地は水力機関の活用によって整えられたのである。実際に、⁽³⁾導入当初の蒸気機関は、水車と組み合わせて用いられることがあり、また、ワットによる新型の蒸気機関がイギリスをはじめ西ヨーロッパ諸国やアメリカ合衆国の綿工業で導入された後も、19世紀後半に至るまで多くの綿紡績工場で水力が使用されていた。

19世紀の西ヨーロッパや北アメリカでは、水力は非生物的動力源の主役の座を蒸気機関に譲り渡すこととなったが、それは水力が時代遅れとなったことを意味するわけではなかった。20世紀に入り、蒸気機関は内燃機関と電気にとって代わられることになるが、いずれの動力源にせよ、電力が機関の駆動や制御等のために必要不可欠なエネルギーとなる。この電力生産において水力発電が極めて重要な役割を果たすことになるのである。1929年に始まった世界恐慌の震源地であるアメリカでは、第32代大統領フランクリン＝ローズヴェルトが恐慌対策として^(ア)ニューディールと総称される一連の政策を実施し、そのうちの 하나가テネシー川流域開発公社（TVA）と呼ばれる7州にまたがった総合開発事業だったが、この事業の一環で水力発電機を備えたダムが多数建設された。これによって公営企業による電力生産が実現し、それまで民間企業によって独占されていた電力市場に比較的廉価な電力が供給されることとなり、さらに周辺地域の工業化を推し進めることにもつながった。

20世紀のエジプトでは、1952年に生じたエジプト革命で中心的役割を果たした⁽⁴⁾ナセルが、エジプトの近代化を目指し、ソ連の支援の下でナイル川中流にアスワン＝ハイダムを建設したが、その具体的な建設目的は、ナイル川の水位を調節しつつ灌漑用水を確保して農耕地を増やすとともに、水力による大規模発電を行って工業化を進展させることにあった。この水力発電によって、年間100億キロワットという膨大な電力が生み出されることになるのである。しかし、このような大規模ダムの建設は、他方で周辺や下流域の環境に少なからぬ影響を与えることがある。事実、前5世紀アナトリア出身のギリシア人歴史家で、「歴史の父」と称される（ E ）がその著書で言及していたナイル川

(5) 複数の古代遺跡が水没することとなり、文化的な影響も無視できないものがあった。

それでも、発電時に二酸化炭素や窒素酸化物を排出しない水力発電は、環境負荷の比較的小さい発電方法として現在でも盛んに用いられており、それゆえ、現代にあっても水力は我々の生活を支え続けているといえる。

設問（１）19世紀後半の一時期この街を拠点に活動したオランダ生まれのポスト印象派の画家で、ジャポニズムの影響がよく表われている「タンギー爺さん」を描いた人物の名前を記しなさい。

設問（２）たとえばスペインは、1545年頃から採掘の始まった、現在のボリビアに位置しアメリカ大陸では最大の銀山で、低品位鉱石の処理のために水力粉砕機を使用し、一時期世界最大の銀産出量を達成したが、この銀山の名称を記しなさい。

設問（３）17世紀末に発明された初期の蒸気機関（セイヴァリ機関）に対し、より実用的で、18世紀前半に炭鉱の揚水用ポンプの動力源として採用されたものの、後にワットが発明した新型蒸気機関に取って代わられる蒸気機関の発明者の名前を記しなさい。

設問（４）ナセルが率いて、エジプト革命で中心的役割を果たしたエジプト軍内の改革派グループの名称を記しなさい。

設問（５）アブシンベル神殿は、アスワン＝ハイダム建設でその下部が水没するのを避けるために移築されたが、この神殿を建設した新王国時代のエジプト王の名前を記しなさい。

設問（ア）ニューディールの産業政策である全国産業復興法が違憲とされたことを受けて、1935年に労働者保護のために制定されたワグナー法の内容とそれが与えた影響について、40字以内で説明しなさい。

下書き用

[illegible]

(40)

Ⅱ 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ E ）に最も適切な語句またはアラビア数字（算用数字）を記入し、下線部（1）～（5）および下線部（ア）に関する各設問に答えなさい。

ユーラシア草原地帯の東端に位置するモンゴル高原は、アルタイ山脈や大興安嶺山脈などの険しい山々に囲まれた高燥な大地である。この地域では、耶律阿保機の建てた遼が12世紀前半に滅亡した後、遊牧部族の間で再編や統合の動きが強まった。12世紀末、モンゴル高原に侵攻した金と遊牧部族との間で抗争が起こると、そのなかで頭角を現した小部族出身のテムジンは、モンゴル高原のモンゴル系・トルコ系諸部族を支配下におき、⁽¹⁾1206年、本拠とするオノン川上流の草原においてチンギス＝カンとして即位した。大モンゴル国を創始したチンギス＝カンは、千戸制を導入して指揮下の遊牧民を再編成し、強力な騎馬軍団を率いて東方の金に打撃を与えた後、西方では中央アジアとイランを統治していたホラズム＝シャー朝を崩壊させた。さらに彼の遠征軍は、チベット系タングートの国家である（ A ）を1227年に滅ぼした。これらの一連の遠征によって、チンギス＝カンは大興安嶺山脈の東麓から中央アジア・イラン北東部に至る地域を勢力下に収めた。

チンギス＝カンの死後、彼の第3子である第2代皇帝オゴデイは、1234年に金を滅ぼして華北を領有し、その翌年にはオルホン川流域に新都カラコルムの建設を開始した。チンギス＝カンの長子ジョチの次子であるバトゥは、西征を指揮してキプチャク草原や東ヨーロッパを制圧し、中央ユーラシア西部にキプチャク＝ハン国を建てた。西アジアでは、第4代皇帝モンケの弟であるフレグが1258年にアッバース朝を滅ぼし、イランとイラクを中心に⁽²⁾イル＝ハン国を建てた。また中央アジアには、チンギス＝カンの次子チャガタイの子孫を君主とするチャガタイ＝ハン国が成立した。皇帝位をめぐる争いに勝利し、第5代皇帝に即位したクビライは、華北に拠点をおき、南宋を滅ぼして中国全土を支配した。このように各地で成立したモンゴル諸政権は、大モンゴル国の皇帝のもとで緩やかに連合し、ユーラシア大陸の東西に広がる一大帝国を成したのである。

14世紀半ば、中央アジアのチャガタイ＝ハン国は、マーワラーアンナフルを中心とする西部と、モグーリスタンと呼ばれる草原地帯である東部に分裂した。トルコ化・イスラーム化が進んだ西部では、ハンの権力が後退し、アミールと呼ばれる遊牧部族の統率者たちが各地で覇権争いを繰り広げた。有力なアミールの一人であったティムールはこの抗争を制し、（ B ）年にティムール朝を樹立した。モンゴルの伝統を尊重し、チンギス家系の女性を娶ることで自らの威信を高めたティムールは、アミールたちの抵抗を巧みに退けつつ、モグーリスタンやアム川下流域のホラズムに遠征した。こうして王朝の成立から約10年間で中央アジアの支配権を握り、モンゴル帝国の再興を目指して大規模な征服活動を開始した。

西アジアへの遠征では、イル＝ハン国から自立した大小の諸勢力を次々と攻略し、その過程でアフガニスタンからイラクに至る各地の重要都市を獲得した。さらにアナトリアに進軍したティムールは、1402年にアンカラの戦いでオスマン帝国の軍を破り、そのスルタンを捕虜とした。北方遠征では、

カスピ海に注ぐヴォルガ川の流域に侵攻し、キプチャク＝ハン国の首都サライを破壊した。その後、次第に弱体化したキプチャク＝ハン国は、ヴォルガ川中流域のカザン＝ハン国や、クリミア半島を本拠とする⁽³⁾クリミア＝ハン国などに分裂した。またティムール朝軍は、アフガニスタン東部の都市である（ C ）からインダス川を越えて北インドにも進出した。このように各地で戦果を上げたティムールは、中央アジア、アフガニスタン、イラン、イラクに及ぶ大国を一代で築き上げた。しかし、ティムールが1405年に東方遠征の途上で死去すると、王族の内紛や地方勢力の反乱によって王朝の統治は乱れ、15世紀後半にはサマルカンド政権とヘラート政権とに分裂した。いずれの政権も、遊牧ウズベクを率いるシャイバーニー＝ハンの攻撃を受けて16世紀初頭までに滅亡し、以後、中央アジアはシャイバーニー＝ハンを創始者とするシャイバーン朝の支配下に入った。

ティムール朝では、セルジューク朝やイル＝ハン国のもとで成熟したイラン＝イスラーム文化の影響を受け、華やかな都市・宮廷文化が開花した。歴代の君主は各地に壮麗なモスクやマドラサなどを建て、自らの威光と敬虔さを示した。学芸の保護や振興も盛んに行われ、ペルシア語やチャガタイ語による文学、写本絵画、書道などが発展した。また、ティムール朝の第4代君主である（ D ）は、サマルカンドに建設した天文台で高度な天体観測を行い、天文学や暦法の発達に貢献した。

ティムールの子孫であるバーブルは、中央アジアの奪還を断念し、（ C ）を拠点として北インドに進出した。1526年のパーニーパットの戦いにおいて、彼は⁽⁴⁾鉄砲や大砲などの火器を用いてデリー＝スルタン朝最後の王朝であるロディー朝の軍を破り、イスラーム王朝であるムガル帝国を創始した。1556年に第3代皇帝に即位したアクバルは、ヒンドゥー教徒の在地勢力であるラージプット諸王国との結びつきを強めて軍事力を強化し、対外遠征を積極的に行うことで北インドを中心とする広大な地域を支配下に収めた。彼の治世には、^(ア)マンサブダール制のもとで支配層が組織化されたほか、土地の測量などを含む税制改革も行われ、中央集権的な統治機構が整備された。また、アクバルはジズヤの廃止を宣言し、多数派であるヒンドゥー教徒との融和や協調を図った。

以後、ムガル帝国の繁栄は、第6代皇帝アウラングゼーブの時代まで続いた。アウラングゼーブは、約50年間の長い治世において、デカン地方への進出を本格化させ、帝国の版図を大きく拡大させた。しかしその一方で、相次ぐ遠征と領土の拡大は帝国の財政を圧迫し、マンサブダール制を柱とする支配体制に動揺を与えた。また、正統的なイスラームを擁護する姿勢を示したアウラングゼーブは、ジズヤの課税を復活させ、ヒンドゥー寺院の破壊を命じるなどして、ヒンドゥー教徒の反発を招いた。パンジャブ地方では、ナーナクが創始した⁽⁵⁾シク教が民衆の間に広まり、その勢力が次第に武装化を進めてムガル帝国の支配に抵抗した。17世紀後半には、デカン地方の西部を中心に一大勢力を築いたシヴァージーがマラーター王国を創始し、ムガル帝国の新たな脅威となった。

ムガル帝国では、ティムール朝やサファヴィー朝で育まれたイスラーム文化とインドの伝統的な様式や技法が融合した華麗なインド＝イスラーム文化が発達した。サファヴィー朝などから招かれた画家のもとで細密画が独自の発展を遂げ、歴史書や詩集などの挿絵として描かれるようになった。その代表的

Ⅲ 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を記入しなさい。

多くの国で女性参政権が認められたのは20世紀に入ってからであるが、その導入を求める声はそれよりずっと以前から聞かれた。また、女性の権利や機会が制限されていたのは、政治の分野だけではなく、教育、文化、経済などさまざまな領域におよんだ。そうした状況の解消を求める運動は歴史的に世界各地で多様な形で展開し、現在も継続している。その一方で、不利な条件下に置かれながらも、女性たちは各地域の社会の中でさまざまな役割を担ってきた。

近世ヨーロッパにおいては、財産所有が制限されるなど女性の法的立場は非常に脆弱であったが、身分制が社会の基盤にあったため、身分の高い女性たちの中には政治的、経済的、文化的に重要な役割を果たした者も少なくない。国政を担った女性としては、オーストリアの強国化に尽力したマリア＝テレジアや、啓蒙専制君主として国内を治める一方で、ポーランド分割など領土拡張を進めたロシア皇帝である（ A ）などが挙げられる。貴族や上層市民の女性の中には、サロンを主催する女主人や、経営者として手腕を発揮した者もいた。18世紀のパリでとりわけ有名だったジョフラン夫人のサロンには、『法の本質』を著した（ B ）や哲学者ダランベールなどの多くの啓蒙思想家が出入りし、知的な社交空間を形成していた。一方で、民衆層の女性たちは、家庭内であれ、家庭外であれ、さまざまな労働に従事していた。繊維工業を中心とした農村での問屋制家内工業においても、女性たちが担った役割は大きかった。

身分制に基づく社会の在り方を大きく変えたのが、フランス革命である。革命の動きに賛同した女性たちは、パリでも地方でも、陳情書の作成に加わったり、男女混成あるいは女性のみの政治クラブで活動したりした。1789年10月に封建的特権の廃止や人権宣言を国王が承認したのも、パンの価格高騰に抗議する女性たちが先導したヴェルサイユ行進がきっかけだった。しかし、1791年憲法では、女性の法的立場の改善は見られたものの、女性参政権は実現しなかった。（ C ）は、同年、『女性の権利宣言』を刊行し、女性に男性と同等の権利を与えることを訴えた。けれども、翌年から始まった対外戦争の危機の中、立法議会にかわって設立された議会である（ D ）で、徐々に独裁的な恐怖政治が展開されるようになり、女性の政治結社も禁止された。ロベスピエールを批判した（ E ）は反革命的とみなされ処刑された。その後のナポレオン支配下のフランスでは、民法典によって、妻は夫に従わなければならない、法廷に単独で立てず、妻の財産は夫の管理下に置かれることなどが定められ、女性の権利はますます制限されていった。

19世紀をつうじて、身分制秩序が解体され、市民層が勃興したヨーロッパでは、さまざまな領域において男女の差異に基づく規範が整えられ、性別役割分業が進行していく。その過程で、女性には子育てと家事を担い、家庭を守ることが求められた。女子初等・中等教育は少しずつ制度化されていくものの、教科において男子との区別が見られ、良妻賢母を育てるべく、針仕事や礼儀作法などが重視された。他方で、社会における女性の不平等な立場を是正することを求めて、女性参政権運動を

中心に、フェミニズム運動も各地で活発化した。また、19世紀後半以降にとりわけ拡大した労働運動や民族運動は女性の権利拡大を支持する傾向があり、これらの運動に積極的に参加する女性たちも多かった。1889年に各国の社会主義運動の組織が集まって結成された（ E ）では、徐々に女性参政権の要求が議題として取り上げられるようになった。植民地では、例えば、オランダの支配下に置かれていた（ F ）島で、県知事の娘として生まれたカルティニが、民族意識の醸成と女性解放のために女子教育の重要性を訴えた。しかし、社会主義運動であれ、民族運動であれ、主導していたのは基本的には男性たちであり、女性の問題は後回しにされることも多かった。なかなか男女平等が達成されない社会の現実と直面し、女性参政権獲得に特化する運動の中には、イギリスのサフラジエツトのように、急進化するものもあった。

1914年8月に勃発した第一次世界大戦は、世界規模に拡大し、さまざまな面で影響を及ぼしたが、女性たちにも新たな経験をもたらすことになる。西部戦線では、1914年9月の（ G ）の戦いで仏英軍がドイツ軍の進撃をくい止め、戦線が膠着した。戦争は長期化し、社会のあらゆる人員や物資が動員される総力戦となった。女性たちも戦前の平和運動や女性参政権運動を休止し、各国で戦争協力に転じた。一貫して反戦の姿勢を維持したのは、（ E ）でも活動し、戦争勃発時はドイツ社会民主党左派に属していたポーランド出身の女性革命家である（ H ）など少数にとどまった。多くの国で女性は、出征した男性に代わり、軍需産業、農業、市電運転手などのサービス業といった多様な領域で労働に従事するとともに、銃後の福祉活動を広範に担った。

戦後、復員男性に職場を譲って、多くの女性が家庭に戻るようになったため、戦争による女性の就労機会拡大は非常時の限定的なものではあった。他方で、戦時中の女性たちの貢献が認められ、イギリス、ドイツ、アメリカなどでは女性参政権が実現した。そのほかの国々でも、女性参政権を求める声は高まった。フランスでは、戦間期をつうじて複数回にわたり女性参政権を認める法案が出されたが、すべて上院で否決された。それでも運動は根強く続けられ、女性の政治的役割は少しずつ拡大した。1936年に社会党のブルムを首相として成立した、反ファシズムを標榜する（ I ）内閣には、キュリー夫妻の娘で自身も物理学者だったイレーヌ＝ジョリオ＝キュリーを含む3人の女性が国務次官として入閣している。日本でも、第一次世界大戦前より、女性の主体的な生き方や諸権利を求める女性解放運動が開始されていた。その先駆者である（ J ）は、1911年、女性だけの手による文学雑誌『青鞥』を刊行している。大戦後には、（ J ）や市川房枝らが新婦人協会を組織し、治安警察法によって禁じられていた女性の政治結社や政治集会への参加を要求した。1924年には、市川らが婦人参政権獲得期成同盟会を結成するなど、女性の権利を求める運動は高揚した。条件付きの婦人公民法案が数度にわたって帝国議会に提出されるものの、実現することはなかった。フランスでも日本でも、女性参政権がようやく認められるのは、第二次世界大戦末期から終戦直後にかけてである。

IV 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を記入しなさい。

中原から見れば西方の後進地域に位置する秦は、法家思想の導入によって戦国七雄の一つとして台頭した。孝公が（ A ）を登用して変法を断行し富国强兵を推進したが、後の始皇帝の法家思想による中国統一への道標となった。春秋・戦国時代に花開いた諸子百家は、思想や技術を探求する学派であると同時に、官吏を育成するための機能も果たしていたが、始皇帝の焚書・坑儒によって、秦王朝は法家一色の様相を呈した。封建制が廃され、官吏を派遣して統治する（ B ）が全国に施行される中央集権化のもとで、秦の官吏として重きをなしたのは法家であった。

秦の過酷な法律と急進的な政策は大きな反発を招き、全国的な反乱によって、始皇帝の中国統一からわずか15年で滅亡した。そのことに鑑みて、漢王朝成立当時は道家思想による黄老の政治思想が重んじられた。武帝の時代には、天人相関説に基づいて皇帝支配の正統性を論じた儒学者である（ C ）が現れ、儒学は国家の学問としての重要性を増していくことになる。漢の経済の基盤は秦と同様に家族単位で小規模な自作農であったが、没落農民が発生すると、それを小作人として支配下に入れて大土地所有者となる豪族が勢力を増した。武帝の頃より本格的に機能しはじめた（ D ）は、優秀な人材を地方長官が中央に推薦する官吏登用制度であるが、それは地域社会で経済力と声望を有する豪族に有利な制度であった。豪族の子弟は儒学を奉じて地域での名声を保持することによって、官界への進出を果たしていく。

後漢末、外戚と宦官による政争や相次ぐ自然災害が続いたことにより、184年に農民反乱である（ E ）が勃発すると、王朝の自浄能力が失われていることが露呈した。各地に群雄が割拠して社会秩序が混乱するなかで、豪族は流民を受け入れて荘園を拡大しつつ自衛し、儒学の教養を共通の指標としながら社会的な影響力を増していった。そうした情勢のもと、三国時代の魏ではあらたな官吏登用制度として（ F ）が行われた。中央から派遣された官吏が地方の人材の学識や品行を査定し、その査定に応じた職を与える（ F ）は、能力による人材登用を標榜するものである。しかし、（ D ）と同様に有力豪族の既得権益が強まると、続く南北朝時代には「上品に寒門なく、下品に勢族なし」と言われるように、高級官職は有力豪族によって独占された。家柄の序列が固定化し、名門とされる豪族はやがて貴族化して、その勢威は往々にして皇帝をも凌ぐものとなった。

魏晋南北朝時代を終息させて、隋の初代皇帝文帝となった楊堅は、（ F ）にかわって、科目試験によって官吏を選ぶ科举の制度を創始した。科举は唐以後の諸王朝にも継承されるが、創始当初は六朝時代から続く貴族の勢力が強く、科举は官吏登用の一部を占めるに過ぎなかった。7世紀に則天武后が科举官僚を重用したことによって、政治の担い手が貴族から新興の科举官僚へと移る趨勢をみせはじめる。その後、安史の乱による大混乱を経て、門閥貴族が没落して科举官僚が本格的に政治の表舞台へと登場することになる。科举官僚たちは国家の行く末を案じ、自分たちこそが政治の舵取りをするのだという強い使命感をもって唐王朝の再建に臨んだであろう。科举の最難関である進士科に

若くして及第した（ G ）は、儒学の精神に則り、社会問題や民衆が抱く不満や嘆きを新楽府と呼ばれる漢詩の形式で数多くうたった。（ G ）の平易な詩文は日本でも広く愛好され、『枕草子』の「香炉峰の雪」のエピソードでも知られている。

北宋を興した太祖（ H ）によって、皇帝自らが最終試験を行う殿試が創設されるに及び、科挙は制度としての完成を見た。科挙は元の統治下で低調となるが、明・清において復活し、隋の創始から数えると約1300年の長きにわたり官吏登用の基幹として継承された。

儒学の理念に基づく官僚が中国政治の主役であったことは疑い無い。しかし儒学とは距離を置く人士も存在した。魏晋の時代に政争を避けて清談にふけり、その自由奔放な言動への敬愛を込めて後に（ I ）と呼ばれる阮籍・嵇康らはその嚆矢である。儒学の偽善性を批判する人々の多くは、老荘思想に拠り所を求めた。その一方で、科挙の受験に挑み続けて生涯を終える者が数多く現れるという社会問題も生じた。儒学社会の弊害に対する不満や批判の一部は、在野の文人の活動の原動力となり、それは民間芸能や小説の分野において発揮されることとなった。清の呉敬梓は、自らも科挙に及第できずに貧困生活を送りながら、官界の腐敗を諷刺して科挙制度を批判する白話小説『（ J ）』を著した。漢詩によって儒学に基づく政治的な提言を行おうとした（ G ）から、小説によって科挙と社会の暗部を描いた呉敬梓まで、中国においては伝統的に政治・思想と文学の不可分性が強い。魯迅が『阿Q正伝』や『狂人日記』によって、近代化を阻害する悪弊として儒学を批判したこともその流れのうえにある。

20世紀初頭、清朝末期に科挙制度は廃止され、儒学には否定的な眼差しが注がれた。しかし現代中国において、儒学的な倫理観を再評価することによって社会秩序の維持を目指す方針が示されることもある。肯定するにせよ否定するにせよ、牢固たる儒学の痕跡は現代中国にも見え隠れし続けている。

